

## 学生企画

# 学生編集委員

## の 講義探訪

近藤先生の講義を初めて受けた学生はたいい面食らいます。  
なぜなら

- ・今まで受けてきた学校の授業スタイルとまるで違う
- ・自分のレベルに気付かされる
- ・面白い

から。

今回は、そんな魅惑の近藤刑法ワールドをたっぷりお伝えします。

学生編集委員 有谷さくら／尾崎仁淑／高畑冬香

### 刑法（総論、各論）の講義の流れ

1週間前：eラーニング（インターネットを使った学習システム）で「次週の講義情報」をチェック、掲載されている「事前公開質問」について検討する。

当日：事前公開質問を中心に対話形式で講義

後日：疑問点があるときは、「トラ説（トラブル状況説明書）」で疑問点を報告、eラーニングにアップされた近藤先生からの回答を見ながらさらに考える。

### 事前公開質問について

**進行** 今回は、1年生対象の刑法総論・各論を担当されている近藤和哉先生に学生が質問をして、神大ローの講義を学生の目から紹介します。同時に、自分たちの学習スタイルも見直せたらと思っています。

ではさっそく、事前公開質問について伺います。なぜ、講義の前にあらかじめ質問を公開しようと考えたのか、お聞かせください。

**近藤** まずは、僕がみなさんに尋ねたい質問の多くが、みなさんがその場で聞いてすぐに理解し、答えられるようなものではなかったことが大きな理由ですね。講義の時間は限られていますから、質問の意味の理解に苦しんだり、答えの発見に迷走したり、これはたいへん重要なプロセスですが、講義中にはなく、家でじっくりしてもらおうと思ったわけです。

また、問いを与えずに、例えば漠然と、この章について予習してきて下さいと言っても、みなさんの勉強の能率は、恐らく、非常に悪くなるだろうと思ったことも理由のひとつです。やっぱりおなかが減っていないときにスーパーに行っても、何を買おうかアイデアは浮かばないんですけれど、おなかが減っているときには食材を見れば、真剣に選ぶ、しっかり目に入ってくる、そういうことはあると思うんですよ。みなさんには、ただ何となく教科書を読むのではなくて、疑問を持って、それに対する解決の糸口を見付けるために教科書を読む、という勉強のパターンを作ってもらえたらいいなとは思いましたね。

どうでしたか。最初から何の目的もなく教科書を読んでいくのと、ある問題に答える目的があって教科書を読むのと、何か違いを感じましたか。

**学生A（1年）** 自分が疑問に思っているところを積極的に探して読もう、という意欲が増す気がしました。漫然と読むよりは真剣に、集中して読むように思います。

**学生B（2年）** ただ、刑法の講義前には、先生の問いに答えられるか不安で胃が痛かったという学生も結構多いようですが。

**近藤** 質問されるってことはプレッシャーになるので、嫌う人もいると思うんです。で、プレッシャーなのは何でかということ、自分の能力をフルに使わないと対処できないからなんですよ。一般的な講義のスタイルが何で楽かとい

うと、聞いていれればいいだけだから。みなさんの目的が、学生生活を平穩無事に送ることなんだったら、それでいいと思うけれど、ロースクール生は違う。やっぱり今の自分を超越る能力を身につけなくちゃいけない。そのためには、プレッシャーを受けて能力の限界を高めながら勉強するのがいいんじゃないかな。そうだとしたら、もっと勉強しなきゃいけないんだと、毎日気づくことができるようなやり方のほうがいいと思うんですよ。

(座談会当日風景)



#### ソクラテスメソッドについて

**進行** 先生から学生に対して一方的に講義をされないのはなぜですか。

**近藤** 僕は、基本的に講義というのは能率が悪い教え方で、それをあえてやる、みなさんにそれを受けさせるというならば、みなさんが一人ではできない内容を提供するべきだと思うんです。だから、みなさんが自分でできることで必要なことは、家でやっていただく。講義の時間では、皆さんが家ではできないこと、同じ教室に一定の時間集まって、僕がそこにいてしかできないことであるべきだと。僕は講義の時間に自習の手伝いみたいなことはしないですけれど、それをしない理由はそこにあります。

**B** ところで、先生からいただく資料は、とても情報量が多いですよ。ですので、講義の後で復習として、事前公開質問と、先生が口頭で説明して下さったことと、いただいた資料とを自分でつなぎ直すことが本当に重要だと思うんです。

**近藤** そうですね。講義の際にみんなにお渡ししている資料は、家にたとえるなら、基本的な骨組部分にすぎません。ですから、資料を渡

されたことで安心せずに、壁を貼るとか床を貼るとか屋根をつけるとか、ものすごくたくさん作業が残っていることを忘れないでほしいですね。

#### 具体例について

**進行** 講義が面白いという点ですが、近藤先生の講義では笑いが絶えないですよ。

**近藤** そうですね。別に授業に限らず、僕にとっては、すべてのことはやっぱり面白くなきゃしょうがない。みなさんにとっても、おもしろいことが、結局、一番能率のいい方法なんじゃないかなと思うんです。つまらないことと面白いことと、どっちに注意が向くか、集中力が高まるかということですね。

**B** 面白いといえば、先生は面白い具体例を考えてくださってよくおっしゃいますよね。

**近藤** 具体例を考えようとすると、本当に理解しているかいないかがよく分かりますね。抽象的には説明できるけど、具体例が思いつかないということは、理解できていないということです。

あと、具体例を考えることによって、自分が何を問題にしているのかのターゲットをはっきりさせることもできるんですね。例えば人生の目的とは何かと抽象的に考えていても答えは出ないけれども、彼女と別れるべきかというような問題に置き換えると、同じことを考えるとしても考えやすくはなる。

それから、具体例を面白くする理由としては、さっきも出ましたけど、面白ければ注目するだろうし、記憶にも残るだろうということですね。

#### トラ説について

**進行** トラ説はどのようなきっかけで始められたのでしょうか。

**近藤** まず、皆さんの勉強になるかなと思ったということですね。口頭での質問の時には甘えが許されるわけですね。まとまってなくても、先生が気持ちを汲んでくれて補ってくれるわけ

ですが、書く場合には、ともかくも完結させてそれを渡すという作業があるので、その分ハードルが高いわけです。口頭の質問をみなさんが好むのは、そのほうが楽だから、自分の能力が試されないからなわけです。でも、自分にとって何が分からないことなのか、それをどういうふうに他人に伝えるかというのをうまくできるようにすること、さらにそれを文章化できるということは、みなさんにとって、ぜひとも必要な能力です。分からないことをすぐに聞いていたのでは、この能力は発達しない。それに、実際にトラ説を書こうとすれば、書いている途中で答えが分かることもたくさんあると思うんです。皆さんには、そっちの道を通してほしい。

B トラ説のいいところって、他の人の疑問が分かるころだと思うんです。人が質問しているときに自分もその話を聴きたいって思うことは、誰しもあると思うんですけれど。

近藤 そうですね。同じことを2回も3回も聞かれて同じように答えるというのはとてももったいないし、そこでの会話というのは消えてしまうわけですね。その次の世代とか、クラスの他の人とかには伝わらないけれど、トラ説という形で残しておけば、何世代も前の考えとか答えとかを読んで理解することができる。

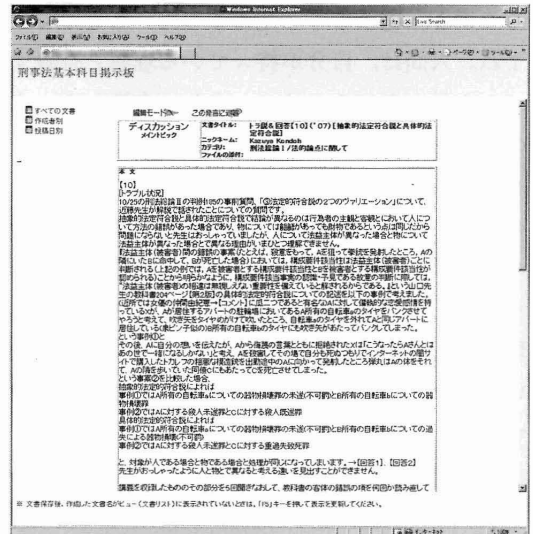
ところで、継続的にトラ説を出すことで力がついてくるんだけど、みんな1回で終わっちゃうことが多い。別に短いものでも構わないのに何でなんだらうかな。

A 他の人が書いたトラ説を見ると、私はここまで書けないし、わざわざトラ説で聞く質問でもないかな、と少し思ってしまう。レベルが低すぎるから書き直しをさせたことはありましたか。

近藤 それはないですね。トラ説の目的は、僕が答えることというよりは、皆さんに考えてもらうことなので、レベルが低いことを考えなければいけない人は、考えただけで既に目的の半分は達成されているわけですね。確かに回答を読んで参考になったとか、同じ疑問を抱いて

いたという人は少ないかもしれないけれど、たととしてもその人がそれを書いただけで十分トラ説の存在意義があると思うんですけれどもね。

〔トラ説画面〕



講義と司法試験について

進行 学生の中には、講義と、司法試験とを分けて考えてしまって、講義はあまり有益ではないと考えている人もいるようですが。

近藤 その意見は、僕にはよく分からないですね。僕は、みなさんには、判決や検察官、弁護人などの主張内容のおかしなところを見抜ける、自分の主張を説得力をもって展開できる、そういう法律家になってほしいと思いますが、僕がお話している程度の論理を理解し使いこなすことができない人に、それができるとはちょっと想像できない。司法試験で良い点が取れるかも、疑問に思います。

A 司法試験のことですが、講義を受けただけでは論文が書けるようにはならないと聞いたことがあります。つまり、論文を書くときには、構成要件とか、違法性とか、結局パターンを暗記しなければいけないって聞いたのですが…

B パターンを覚えなければいけないと言われて不安になる気持ちは分かる気がします。ただ、おそらく「これ丸暗記してください」ですませてもいいところを、近藤先生は理論立てて

やっているんだと思う。逆に言うと、僕らがしっかり理解していれば、暗記なんかしなくてもすっと入ってくるんじゃないかな。

近藤 丸暗記って、僕はとても難しいと思うんですよ。電話番号を覚えるみたいなものですよね。人間は、自分が持っている理屈と合致するから覚えられるわけで、これに合致しないものを与えられてもなかなか覚えられない。年号を語呂あわせで覚えようとするのは、このことの表れですね。だから、丸暗記したものは、そのときは一瞬覚えているかもしれないけれど、そのあと一瞬で忘れるという問題がある。でも、理屈をちゃんと理解したものは、それは忘れない。それから、丸暗記はつまらないと思うんですよ。

より重要なことは、実務家の方がよく言うのですが、法律家になった時に事件に対応する時には同じ事件は二つとないし、教科書に書いてあるような事件というのもやっぱりない。つまり、実務での仕事は、常に応用問題だということですね。丸暗記だけをして理屈がない人には、応用問題を解くことができないということです。

論文答案を書けないっていう話もありましたけれど、あんなのは、ちゃんと理解できていたら、書ける書ける。

進行 私は法学部出身ではないので、入学前には、法律の教科書も読んだことはなかったし、もちろん法律の文章を書いたこともありませんでした。でも、近藤先生の授業を受けて文章の書き方を教わったというイメージを私はすごく持っています。書き方が分かれば教科書の読み方も分かるし。

近藤 僕は法学部出身者と法学部以外の出身者で、あまり違いはないと思うんですよ。どういうふうに生きてきたかというのと、あととはもとの才能とか適性なんじゃないかと思うんです。

B ところで、先生が考える、よい勉強の仕方ってどんなものですか。

A 私が勉強の仕方が分からなかったときに、「判例を読んで、自分がどうするか考えて、事前公開質問を見て、分からなかったら教科書を読んでみてください。そうやって得たパーツを使ってどういうふうに判決を書くかを考えるという勉強をしてみたらどうでしょう」というアドバイスをもらいました。

近藤 皆さんに必要なのは、現実の事件を目の前において、どういう解決があるかっていうのを自分で考えて、考えるのが楽しいって思えるような考え方をすることなんじゃないかなと思いますけどね。

進行 それでは最後に近藤先生から一言お願いします。

近藤 今日みなさんとお話できて非常に楽しかったです。今回のようにみなさんとお話しするのも楽しいのですが、みなさんがうまく勉強して、とりあえずの目標にどんどん近づいていくのを見るのもとても楽しいので、その両方で僕を楽しませていただきたいなと思います。

これから、僕もみなさんが楽しく勉強ができるようにがんばりますので、これからもよろしく願いいたします。

A 今日は、近藤先生のお話をうかがえて、自分の勉強についても見直すことができ、やる気がおきました。

B 僕もです。ありがとうございました。

進行 本日は、ありがとうございました。

(近藤先生授業風景)

